

<病院だより>

医療法人八仁会久御山南病院

理事長・院長 南 八 王
副 院 長 木 村 敏 之

はじめに

当院は昭和26年（1951年）現院長の父故南八一先生が夜間診療所を現所在地に開設されたのが始まりです。昭和63年（1988年）一般病床40床の新館を増築し久御山町唯一の病院となる。京都府立医大から外科医のお手伝いもあって2次救急告知病院の末席も担っておりますし、私が就任した当時は全身麻酔による開腹手術も行っておりました。

その後、医療法人八仁会久御山南病院と組織変更し外来での3つの時間帯（午前・午後・夜）の診療も続けられ地域のニーズに答えていたことで農業を専業とされているこの地域の住民からは信頼を得ていた。

立地と理念

京都市伏見区の淀地区に隣接した、宇治川流域の元巨椋池干拓地と旧村落が大部分を占める久御山町は大都市近郊の役目として米、野菜、果物生産など農業で生計を立てている農家が基本であり、今迄でも京都府民の台所の一角を果た

しているが、流通産業の発展と少子高齢の波には勝てず若者の農業離れが続き今や休閒地も多い。宇治川、木津川、国道1号線に囲まれた三角形の田園地帯、ほぼ中央に位置する簡素な農耕地域での医療経営には、前院長の時から理念が今も院内のあちらこちらに見られる額からも感じられる。

- 1：全人的医療を行う。
- 2：地域に根ざした医療を行う。
- 3：患者中心の医療を行う。

病院の概要

医療を取り巻く情勢は厳しく、国の社会保障制度や基本的理念が不安定な状況の中、医療の本質を見誤ることなく地域のニーズを受け止め、医療を継続することは至難のことである。現開設者の医療法人八仁会理事長 南八王院長は平成7年（2004年）に久御山南病院を開設。翌平成8年には訪問看護ステーション『あおぞら』、平成10年8月には社会福祉法人八康会特別養護老人ホーム「楽生苑」を併設し、平成14年には43床へ増床、平成18年には61床と増床を重ね、



時勢に則した障害者等入院基本料を算定する一般病床としての病院の全体像が見えてきた。平成19年8月には時代を先取りし、介護保険制度をきめ細かく利用出来る小規模多機能型在宅介護事業所を立ち上げ、居宅介護支援センターと共に「ケアリビング久御山」のケアモール施設を町内の医療と介護、福祉の拠点とするべく、同じ場所に訪問看護ステーションを合わせ町役場に近く確保できたことは町民にとっても大変喜ばれている。さらに平成22年8月には消化器内視鏡センターを開設、当地区としては自慢の出来る設備：電子内視鏡（FUJINON II 内視鏡）、による上部下部消化器検査と、心臓循環器、腹部超音波装置（NEMIO SSA-550A）を設け診療内容の向上と精度管理を重視した検診事業に資した。X線CT（アスティンKG）、乳房撮影装置（MGU-100D）も利用頻度も高くそれらの精度管理にもダブルチェックなどを原則としている。

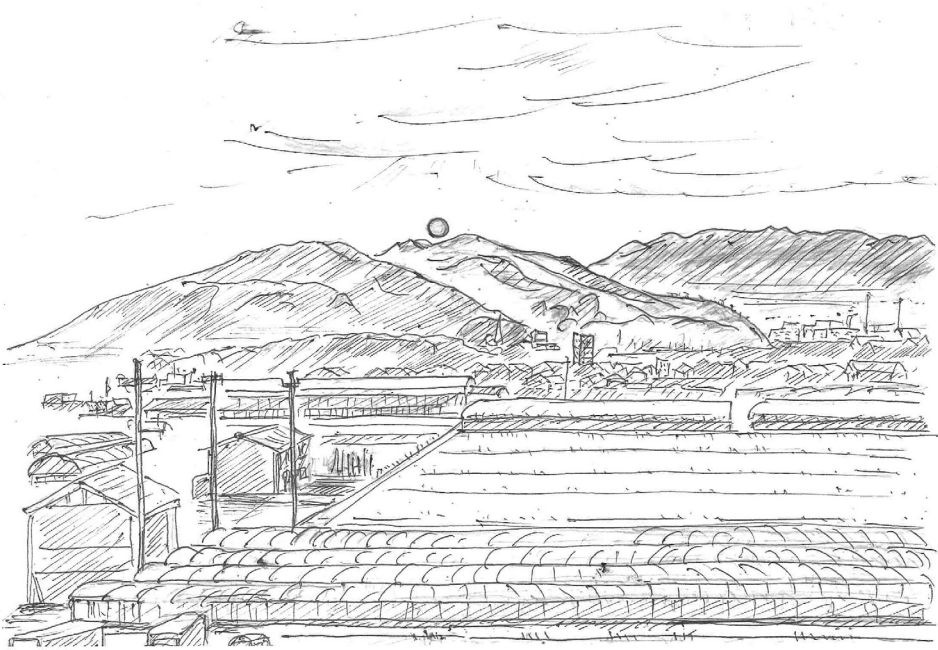
標榜診療科目は内科、外科、整形外科、耳鼻咽喉科、皮膚科、眼科、小児科、リハビリ科を、院内標榜科目として総合診療、特殊クリニックとして糖尿病、循環器、アレルギー（耳鼻科）、乳腺、呼吸器、肝臓など臓器別診療、プライマリー医療には欠かせない一次救急医療、検診業務にも重点的に取り組んでいる。現在のところ外科的手術をしておりませんが、年間数例のPEG（内視鏡的胃瘻増設術）を行うぐらいで、交通環境に恵まれていないことで診療圏も限られておりこの規模の病院として1日150名前後の外来患者数は決して多いとは言えない。しかし当地区には工業団地があり又、京滋バイパス・第二京阪・国道1号線などに代表される交通の要所となっており運送業、中小企業を多数抱え事業所の検診事業、町民基本検診がともに住民の健康管理に欠かせない役割を果たしており外来業務も多忙である。

入院医療では先ほども述べたように障害者病棟として看護体制13:1を維持し地域介護施設または入院患者の急性期疾患にも対応出来る。入院患者さんはALS（筋萎縮側索硬化症）、多系統萎縮、パーキンソン病など神経難病のほ

か、脳血管疾患、筋系統疾患、などによる多彩な身体障害者をお預かりしているため、実態は慢性疾患ではあるがリハビリテーションへのニーズは高く、スタッフの充実に努め現在PT:5名、OT:1名で近隣の病院からの紹介入院、訪問リハビリ、嚥下訓練などにも対応出来る。常勤医は産業医の認定医で主として総合診療を担当し、特殊外来は各非常勤医が主に対応し患者さんのニーズに応える努力をしている。久御山町内の唯一の病院として、地域の健康と生活を守る責任があり、お元気な高齢者も多く居られるが急性疾患で入院される方も多く可能な限り当院での治療を提供すると共に、適宜より専門医療を必要とする場合には、ご本人ご家族の希望に沿った紹介を行って、回復して当院へ戻ってこられても在宅医療や介護施設利用など常に考慮した介護・福祉と病院機能を総合的に考慮した住民管理を目標としている。そのためには小規模ながら全職員が一体となり病院の理念に沿った機能を高める必要があり、全てのスタッフのモチベーションを高めなければならない。そこで現院長の発案で数年前から毎年1回各部署の事業計画と事業報告を作成し町内への情報開示と広報活動に役立てたおり、また毎週行うNST（栄養サポートチーム）活動、毎年1回年末に行われる介護・福祉・医療担当者が集まる研究発表会も互いの親睦を深め忘年会前の恒例事業となった。診療実績としては手術こそ行わないが、がん検診では年間約20名の悪性疾患（昨年度）を発見、企業検診も年に44会社（1366名）、町民基本検診653名と外来事業でのウエイトは大きい。

今後の当病院のあり方

医療・介護・福祉の連携から生れる町民への「安心と信頼」のサービス提供と迅速な「病病連携」による急性期疾患対応が都市近郊農村地区の規模は小さくとも創業時からの基本理念を忘れない当地区のオアシスの役割を果たすことが必要と考える。将来どうしても欠かせないプライマリー医療の課題の一つとしてこの田園環境を生かした在宅医療、訪問診療の拡大と充実、



男山に沈む夕日 (医局の窓から望む)

病院総合医療と研修医の養成，それに障害者，
神経難病治療への取り組みなど夢の大きい課題
にも是非近づきたいと考えていますので今後と

も大学の先生方のご支援をよろしくおねがいます。

文責 副院長 木村敏之 (昭和 40 年卒)